

昭和天皇
からのお叱
りです。あ
なたこそ、
御入をなさ
します。

湾岸をめぐるつぶやき

湾岸危機以来、私
らかになる戦争の
通じて目のあたり
情勢に対し、誰も
けである。そして
立場で意見を持っ
にかく戦争は反対
日本の生きる道を

達は刻々と内容の明
あとさきも、報道を
にしてきた。世界の
が情報通になったわ
それぞれが、様々な
た。母親たちは、ど
と言ひ、国際社会に
模索する政権は、ど

のような動きをするのが得策かを思案し…。けれどもあらゆる意見
は、立場の違いゆえにかみ合うところは少ない。そういう中、美術関
係者も湾岸戦争に対する見解を発表する運びとなった。3月2日に予
定されていた多国精軍の即時撤退を求めた「NOT WEAPON BUT
SWEETS」は残念ながら（！？）その日以前に停戦の動きが見られ、
多国精軍の撤退が発表されたために大きな話題とはなり得なかった。
今、私達の手元には1枚のFAXによるピラが残るだけである。
それを手にして複雑な思いにかられたのは私達だけではないはずだ。
戦争そのものには、少なからず感じるところもあり、一人の人間とし
て意見もあるが、美術関係者という枠のなかで、私達は何を言い得る
だろうか。

このピラをきっかけに芸術と社会という大きなテーマにぶつかってし
まった。ピラの中で最も引っ掛かるのは「この戦争は確実に芸術を模
倣してる」という1文である。それは「80年代後期、美による需要の
拡大に挫折した芸術（思想）が、より多くに共感を求めて、恐怖、崇
高、戦争のメタファーを多用しはじめたことを考えれば、この戦争事
業は、直接芸術事業の延長に位置づけられている。よって全ての文化
労働者は、この戦争に対して何らかの責任がある…」ということなの
である。それについてまだ私たちは何もいうことができずにいる。
TVから得た情報を個人のレヴェルで咀嚼して、戦争自体がアメリカ
の覇権事業だとか、民族の秩序を守るべきだとかは言えるのだが、戦
争と芸術という大きなテーマの前にまだ沈黙を続けているのである。
1つ深呼吸をして非常にマクロな視点から、戦争が芸術を模倣して
いるという点を認めたとしても、美術関係者、あるいは文化労働者がす
べきことは別のところにあるのではないかと気がする。
国際政治の中で日本の立場を保全しようと勤める政治家たちが、個人
の身上を吐露として、悲惨な戦争が終わった後に、グループ展を開催
したとしたら…。そういうグロテスクな想像を喚起するようなものが
このピラにはあった。しかし、私達の意見はまだまとまっていない。
今後折りにふれて、この問題を考えていきたいと思う。